

Ⅲ－３．臥梁付中型コンクリートパネル造

1. 概要

(1) 適用範囲

本耐震診断システムは、「臥梁付中型コンクリートパネル造」の耐震診断を行う場合に適用する。
なお、昭和 56 年 6 月以降の旧建築基準法第 38 条に基づき認定された基準に適合することが確認されたリブ付中型コンクリートパネル造は、地震に対して安全な構造であると判断できるものとする。

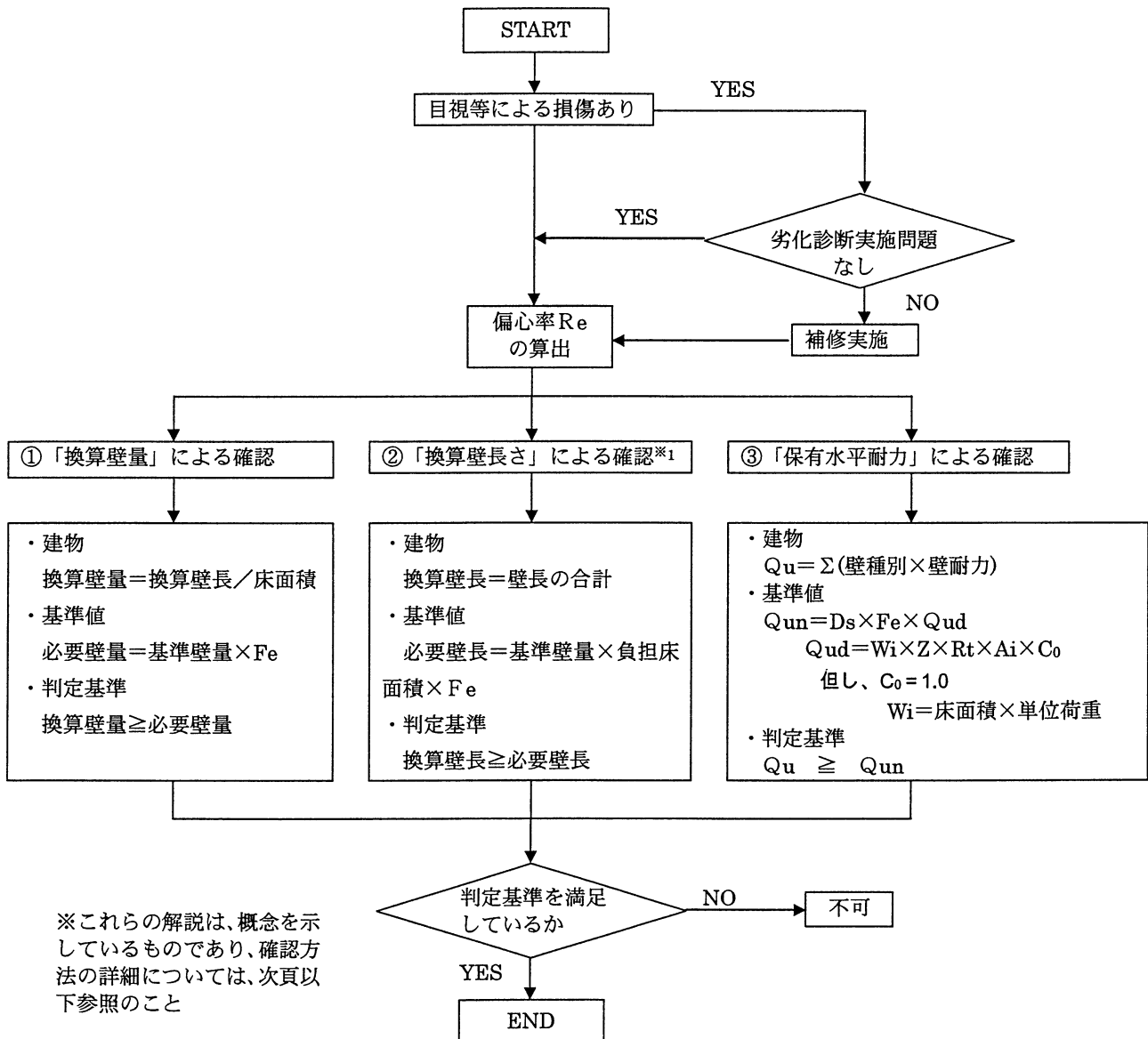
(2) 診断の方法

診断の主目的は、大地震動に対して、その建物が必要な耐震性能を保有しているかどうかを判断するために行うものである。診断は、建築基準法に基づき、建物に必要とされる耐力(簡易な必要保有水平耐力又は必要保有水平耐力)と、建物が保有している耐力(簡易な保有水平耐力又は保有水平耐力)とを比較する一般診断法により行う。

2. 一般診断法

(1) 一般診断法の概要

一般診断法は、予想される大地震に対して、その建物が必要な耐震性能を保有しているかどうかを判断するために行う手法であり、建物の構造計算（簡易な保有水平耐力又は保有水平耐力の検討）により、耐震性能を判定する診断方法である。一般診断法のフローチャートを下記に示す。



※1：耐力壁高さ 2650 mm の場合のみ使用可能

(2) 偏心率の算出

偏心率 Re は、以下の方法で求めた重心及び剛心を用いて算定を行う。

① 重心の算定方法

重心位置は、各耐力壁板の長期軸力を算定し、その軸力を用いて算定する。

但し、建物の仕様が規格化されているので、屋根面形状及び床面形状を用いた簡便な方法（簡便な重心計算方法の例参照）で算定してもよい。

② 剛心の算定方法

耐力壁板の剛性（換算 D 値）はの各係数を用いて求める。

$$\text{剛性（換算}D\text{値）} = \text{耐力壁板による換算値} \times \text{標準}D\text{値}$$

剛心位置は、求めた各耐力壁板の剛性を用いて算定する。（剛心計算方法の例参照）

③ Fe の算定方法

Fe の算定は以下による。

$$Fe = 1.0 \quad (Re \leq 0.15)$$

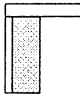
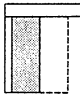
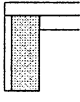

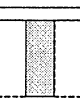
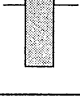
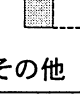
$$Fe = 1.0 + 0.5 / 0.15 \times (Re - 0.15) \quad (0.15 < Re \leq 0.30)$$

$$Fe = 1.50 \quad (0.30 < Re)$$

<簡便な重心計算方法の例>

「リブ付中型コンクリートパネル造」に示した方法に準ずる。

付表1 耐力壁板の換算D値一覧

	No	種類 階 タイプ	60 (cm)			90 (cm)			135 (cm)				
			1層		2層部分	1層		2層部分		1層		2層部分	
			1階	1階	2階	1階	1階	2階	1階	1階	2階		
外 柱	A		0.76	0.59	0.43	1.25	1.03	0.71	2.80	2.05	1.39		
	B		0.74	0.62	0.39	1.44	1.28	0.80	3.24	2.61	1.59		
	C		0.83	0.68	0.50	1.35	1.07	0.84	3.00	2.20	1.5		
中 柱	D		0.81	0.80	0.70	1.37	1.36	1.17	3.00	2.98	2.40		
	E		0.85	0.76	0.57	1.65	1.58	1.20	4.10	3.8	3.13		
	F		1.02	0.92	1.23	1.73	1.56	1.52	3.62	3.26	2.7		
	G		0.86	0.80	0.55	1.53	1.43	1.19	3.77	3.50	2.50		
		その他											

※ 3mを超える開口に接する耐力壁板のD値は、上表に掲げる数値に2階にあつては0.7を乗じ、1階にあつては外柱のみ0.75を乗じた値とすること。

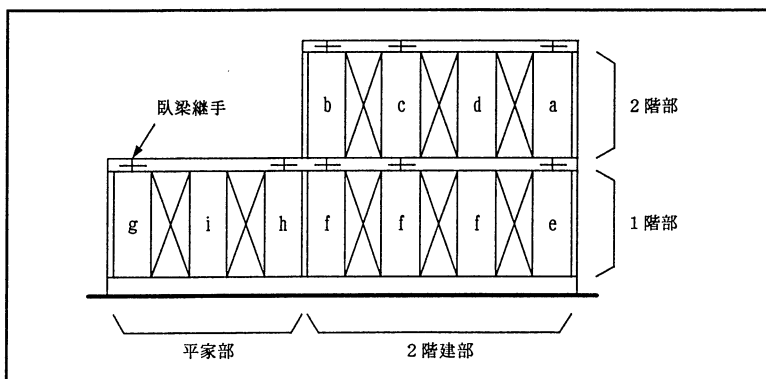
3W板		
2階		1.34
1階	平家部分	3.16
	2階建て部分	2.84

付表2 耐力壁D値一覧表 ※1

壁板	スパン	2階部				1階部				
		外端1 a	外端2 b	継手 c	一般 d	2階建部		平家・平家部		
						外端 e	一般 f	外端 g	継手 h	一般 i
W	0 P	0.30	0.35	0.50	1.20	0.95	1.30	0.75	0.80	1.40
	1 P	0.30	0.40	0.45	1.05	0.90	1.35	0.80	0.85	1.40
	2 P	0.35	0.40	0.45	1.00	0.85	1.35	0.80	0.90	1.40
	3 P	0.35	0.40	0.45	0.95	0.75	1.30	0.80	0.90	1.40
	4 P	0.40	0.45	0.45	0.95	0.70	1.30	0.80	0.95	1.40
	5 P			0.50	1.00		1.25		1.00	1.40
WS WB	0 P	0.25	0.35	0.45	1.15	0.90	1.25	0.65	0.75	1.30
	1 P	0.30	0.35	0.40	1.00	0.85	1.30	0.70	0.75	1.30
	2 P	0.30	0.35	0.40	0.95	0.80	1.25	0.70	0.80	1.30
	3 P	0.35	0.40	0.40	0.90	0.75	1.25	0.70	0.80	1.35
	4 P	0.35	0.45	0.45	0.90	0.70	1.20	0.70	0.85	1.35
	5 P			0.45	0.95		1.20		0.90	1.35
1.5W	0 P	1.05	1.10	1.45	1.70	1.30	2.05	1.80	2.30	2.50
	1 P	1.05	1.10	1.40	1.60	1.20	1.95	1.70	2.30	2.45
	2 P	1.05	1.05	1.40	1.55	1.05	1.90	1.60	2.30	2.40
	3 P	1.05	1.05	1.40	1.55	0.90	1.85	1.50	2.30	2.40
	4 P	1.05	1.05	1.45	1.55	0.70	1.80	1.40	2.30	2.35
	5 P			1.45	1.50		1.70		2.25	2.25
1.5WB	0 P	0.95	1.00	1.30	1.65	1.20	1.85	1.50	1.95	2.25
	1 P	0.95	0.95	1.25	1.50	1.10	1.75	1.45	1.95	2.20
	2 P	0.95	0.95	1.25	1.50	0.95	1.70	1.35	1.95	2.15
	3 P	0.95	0.95	1.30	1.45	0.80	1.65	1.25	1.95	2.15
	4 P	0.95	0.95	1.30	1.45	0.65	1.60	1.20	1.95	2.10
	5 P			1.30	1.45		1.55		1.90	2.05
2W	0 P	1.65	1.70	2.20	2.20	1.40	2.40	2.40	3.30	3.35
	1 P	1.65	1.65	2.10	2.15	1.10	2.25	2.15	3.25	3.25
	2 P	1.65	1.65	2.10	2.15	0.85	2.15	1.95	3.15	3.15
	3 P	1.70	1.70	2.15	2.10	0.50	2.05	1.80	3.10	3.10
	4 P	1.75	1.75	2.15	2.15	0.20	1.95	1.65	3.05	3.05
	5 P			2.15	2.20		1.80		2.95	2.95
2WB	0 P	1.15	1.20	1.90	1.90	1.20	1.80	1.80	2.45	2.70
	1 P	1.15	1.15	1.80	1.85	1.00	1.70	1.65	2.40	2.60
	2 P	1.15	1.15	1.80	1.80	0.85	1.60	1.45	2.40	2.55
	3 P	1.20	1.20	1.80	1.80	0.55	1.55	1.35	2.30	2.50
	4 P	1.25	1.20	1.85	1.85	0.25	1.45	1.25	2.30	2.45
	5 P			1.85	1.85		1.35		2.20	2.35

付表1のスパンとは、壁の両側（端部の場合は片側）の開口幅の合計とする。
付表1の a~i は、付図1による。

※1：耐力壁高さ 2650 mm



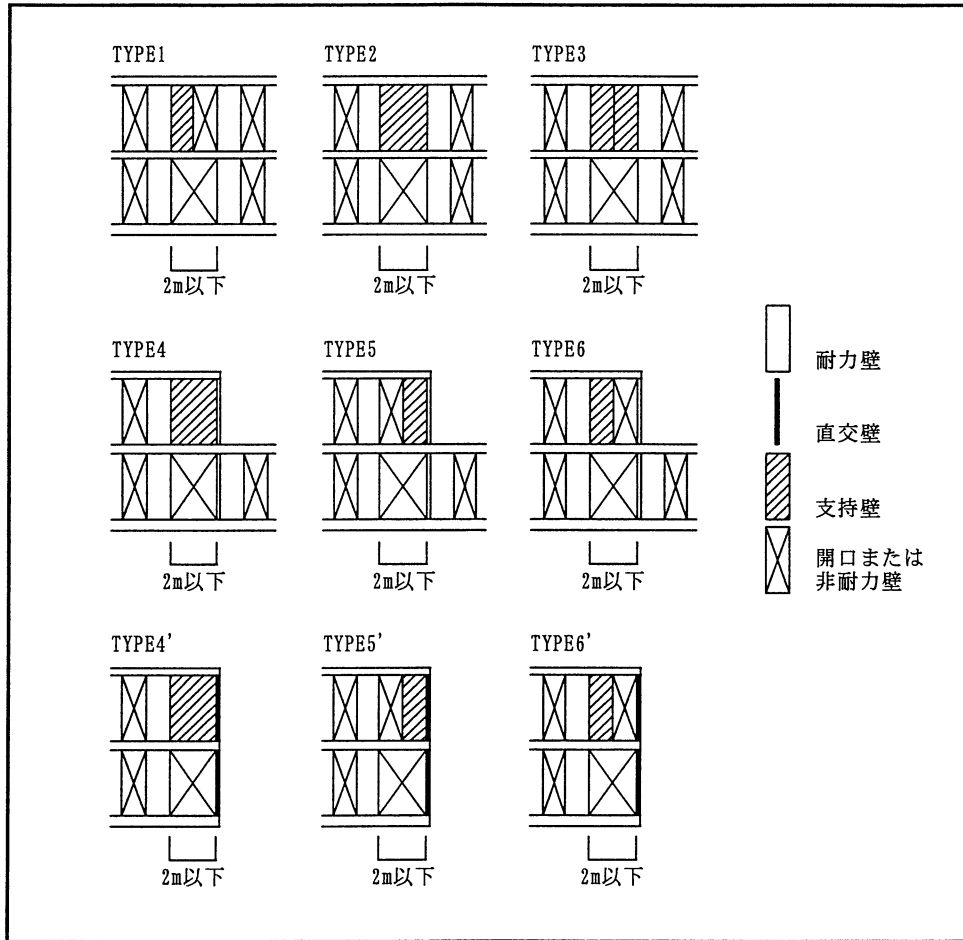
付図1

付表3 支持壁D値一覧表 ※1

	TYPE1	TYPE2	TYPE3	TYPE4 TYPE4'	TYPE5 TYPE5'	TYPE6 TYPE6'
W	1.05	1.20	1.20	0.30	0.30	0.30
WS・WB	1.00	1.15	1.15	0.25	0.25	0.25
1.5W	1.60	1.70	/	1.05	/	/
1.5WB	1.50	1.65	/	0.95	/	/
2W	/	2.20	/	1.65	/	/
2WB	/	1.90	/	1.15	/	/

支持壁のTYPEは、付図2による。

※1：耐力壁高さ 2650 mm



付図2

(3) 建物の安全性の確認

建物の安全性の確認は、以下に示す方法のうち、いずれかの方法で行う。

- ① 「換算壁量」による確認
- ② 「換算壁長さ」による確認
- ③ 「保有水平耐力」による確認

以下に各方法の解説を示す。

① 「換算壁量」による確認方法

1. 各階各方向の換算壁量は、以下の各付表に定める基準壁量以上としなければならない。

付表1 基準壁量一覧（屋根がリブ付パネルの場合）（単位：cm/m²）

階		垂直最深積雪量 (単位：cm)	50 以下	100 以下	150 以下	200 以下
			平 屋 建	10	13	14
2 階 建	1 階	総 2 階	18	20	21	23
		部 分 2 階	$10+8 \cdot A2/A1$	$12+8 \cdot A2/A1$	$13+8 \cdot A2/A1$	$15+8 \cdot A2/A1$
	2 階	11	14	15	17	

表中、A1 は1階の床面積を、A2 は2階床面積をそれぞれ表す。

付表2 基準壁量一覧（屋根が鉄骨造又は木造の場合）（単位：cm/m²）

階		垂直最深積雪量 (単位：cm)	50 以下	100 以下	150 以下	200 以下
			平 屋 建	10	12	12
2 階 建	1 階	総 2 階	15	16	17	18
		2階が1階の床面積の1/2以下	13	14	15	16
	2 階	10	12	12	12	

表中、A1 は1階の床面積を、A2 は2階床面積をそれぞれ表す。

2. R階、2階とも庇がない場合、又は2階のみ庇がない場合の基準壁量は、それぞれ付表1の基準壁量に付表3の壁量低減率を乗じた値とすることができる。ただし、一部庇を設置する場合には付表3を使用しない。

付表3 基準壁量の低減率

庇の有無	階数	階	床面積	垂直最深積雪量 (単位：cm)			
				50 以下	100 以下	150 以下	200 以下
無	1	1	150mm ² 以下	0.95	0.90	0.90	0.90
			0.90	0.90	0.85	0.85	0.85
R階2階 共庇無	2	2	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80
		1	0.95	0.95	0.90	0.90	0.90
			0.90	0.90	0.85	0.85	0.85
2階のみ 庇無	2	2	—	—	—	—	—
		1	—	—	—	0.92	0.92

3. F_e が1.0を超える場合には、付表2及び付表2の基準壁量に F_e を乗じ基準壁量の割増を行う。
4. 壁量算定用壁長さは、同一方向における耐力壁の長さを合計して求める。
各耐力壁の長さは、付表4及び付表5による。

各耐力壁の壁量算定用壁長さ = 標準長さ × 接合ボルトによる低減係数

付表4 各耐力壁の壁量算定用標準長さ(単位:cm)

耐力壁 種類 階	無開口			有開口		3W板 ※2	連続箇所 ※3
	60~76cm 壁	90cm 壁	135cm 壁 (※1)	90cm 壁	135cm 壁 (※1)		
2階	50	90	135(112)	87	75(75)	110	45
						150	
1階	56	90	135(67)	90	112(67)	250	45
						225	

- ※1: 当該耐力壁に限り、1.8m以上の開口に接する外端壁として使用される場合はそれぞれの壁長さとして、表中の()内の数値を用いる。
- ※2: 上段の値は $A_2/A_1 \leq 0.5$ の場合、下段の値は $A_2/A_1 = 1.0$ の場合を示す。 A_2/A_1 が中間の場合は、直線補間により求める。
- ※3: 連続箇所は、壁種類にかかわらず耐力壁又は支持壁間の連続箇所を考慮することができる。但し、3W板との連続箇所は考慮しない。

付表5 各耐力壁の接合ボルトによる低減係数

2階壁

脚部水平接合ボルト種別	W60	W90	W135	3W
$\phi 16$	1.00	1.00	1.00 (0.80)	1.00

1階壁

脚部水平接合ボルト種別	W60	W90	W135	3W
$\phi 16$	0.85	0.85	0.85	—
$\phi 19$	1.00	1.00	1.00	1.00

連続壁の鉛直接合ボルト

壁—壁間鉛直接合ボルト	連続箇所
$\phi 9$	0.40
$\phi 13$	1.00

5. 壁量算定床面積は、原則として耐力壁線に囲まれた部分の面積和とする。
6. 建物の各階各方向(1, 2階のX, Y方向)の換算壁量を算定し、全ての換算壁量が基準壁量を満足していることを確認する。

換算壁量 = 壁量算定用壁長さ / 壁量算定床面積

判定基準: 換算壁量 \geq 基準壁量

② 「換算壁長さ」による確認方法 (※耐力壁高さ 2650 mmの場合のみ使用)

各階各方向の換算壁長は、以下の方法によって定めた必要壁長以上としなければならない。

1. 必要壁長の算定

1-1. 形状特性係数 (Fe) の算定

前項 (2) による。

1-2. ペントハウスを設ける場合の割り増し (La)

2階建 2階部	La	=	85	cm
平家建・2階建 1階部	La	=	50	cm

ペントハウスを設けない場合は、La = 0 [cm] とする。

1-3. 必要壁長の算定

$$\text{必要壁長} = (\text{基準壁量} \times \text{負担延床面積} + La) \times Fe$$

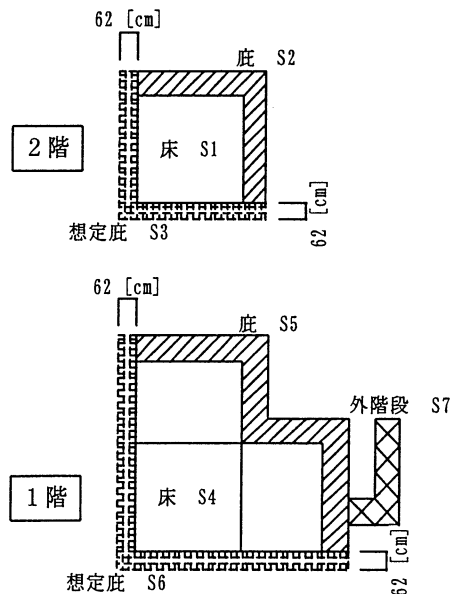
※1 基準壁量

基準壁量は、付表3による。

※2 負担延床面積の算定

負担延床面積は、その階で地震力を負担する床面積の合計とする。

庇の部分、外階段水平投影面積の 1/2 の面積も算入する。なお、PCa 造の外階段で屋根がある場合には、その屋根の水平投影面積の 1/2 の面積を2階、1階にそれぞれ加える。また、庇のない部分については、壁心より 62 cm の庇を想定しその面積を負担延床面積に算入する。



付図1

付表3 基準壁量 (cm/m²)

	積雪区域	平家建	2階建	2階建
			2階部	1階部
非歩行屋根	一般区域 (50cm以下)	8.0	10.0	7.0
	多雪区域 (100cm以下)	9.5	12.5	7.5
	多雪区域 (150cm以下)	10.5	13.5	8.5
歩行屋根	一般区域 (50cm以下)	8.5	11.0	7.0
	多雪区域 (100cm以下)	10.0	13.5	7.5
	多雪区域 (150cm以下)	11.0	14.0	8.5

2. 換算壁長の検討

付表4、付表5に示す換算壁長さを各階各方向について合計することにより、換算壁長を算定する。各階各方向の換算壁長が、必要壁長以上であることを確認する。

付表4 耐力壁換算壁長さ (cm)

			76cm壁		90cm壁		135cm壁		180cm壁	
			WS		W・WB		1.5W・1.5WB		2W・2WB	
2階建 2階部	一般	d	65	(65)	85	(85)	135	(145)	215	(215)
	継手	c	40	(50)	45	(65)	105	(140)	195	(195)
	外端1	a	15	(40)	20	(55)	75	(140)	180	(195)
	外端2	b	35	(45)	40	(55)	95	(140)	180	(195)
2階建 1階部	一般	e	75	(80)	90	(100)	140	(175)	155	(245)
	外端	f	60	(70)	75	(95)	100	(155)	55	(210)
2階建 平家部	一般	i	50	(50)	65	(65)	110	(110)	160	(160)
	継手	h	40	(40)	50	(50)	105	(105)	145	(145)
平家建	外端	g	40	(40)	45	(45)	105	(105)	140	(145)

壁が連続して配置される場合は、() の数値を使用する。

付表4の a~i は、付図1による。

付表5 支持壁換算壁長さ (cm)

	TYPE1	TYPE2	TYPE3	TYPE4 TYPE4'	TYPE5 TYPE5'	TYPE6 TYPE6'
W・WB	85	85	85	55	0	0
1.5W・1.5WB	145	145		125		
2W・2WB		215		125		

支持壁のTYPEは、(2) 偏心率の算出付図2による。

③ 「保有水平耐力」による確認方法

1. 保有水平耐力が、 D_s ($=0.55$) 及び F_e を考慮した必要保有水平耐力を上回ることを確かめる。
 なお、保有水平耐力は、各階、各方向 (1, 2階のX方向及びY方向) について算定を行うこと。

$$\text{保有水平耐力} \geq \text{必要保有水平耐力} (D_s=0.55, F_e \text{ を考慮})$$

$$\text{必要保有水平耐力} = D_s \times F_e \times Q_{ud}$$

$$\text{但し, } D_s=0.55$$

$$Q_{ud}=W_i \times Z \times R_t \times A_i \times C_0 \quad (C_0=1.0)$$

2. 必要保有水平耐力を算定する際の建物荷重は付表1の単位床面積当りの地震力荷重と壁量算定用床面積を用いて算定する。

付表1 単位床面積当りの地震力荷重 (単位: tf/m²)

区分	平家建	2階建の2階	2階建の1階	積雪区分
屋根がリブ付きパネル	0.80	0.68	$w=0.80+0.56 A_2/A_1$	一般50cm以下
	0.99	0.88	$w=0.99+0.57 A_2/A_1$	多雪100cm以下
	1.08	0.95	$w=1.08+0.58 A_2/A_1$	多雪150cm以下
	1.18	1.05	$w=1.18+0.59 A_2/A_1$	多雪200cm以下
屋根が鉄骨又は木造	0.41		$w=0.69+0.27 A_2/A_1$	一般50cm以下
	0.56		$w=0.81+0.30 A_2/A_1$	多雪100cm以下
	0.65		$w=0.91+0.29 A_2/A_1$	多雪150cm以下
	0.73		$w=0.99+0.29 A_2/A_1$	多雪200cm以下

$A_2=2$ 階床面積

$A_1=1$ 階床面積

3. 保有水平耐力は、付表2に示す各耐力壁の標準保有水平耐力及び付表4-2の接合ボルトによる低減係数を用いて算定する。

$$\text{耐力壁板1枚当たりの保有水平耐力} = \text{標準保有水平耐力} \times \text{接合ボルト低減係数}$$

$$\text{建物の保有水平耐力} = \text{各耐力壁板の保有水平耐力の合算値}$$

付表2 耐力壁及び支持壁の1枚あたりの保有水平耐力 (単位: t/枚)

耐力壁板種類 使用階	耐力壁						支持壁		連続壁箇所 ※3
	無開口				有開口		60~76cm壁	90cm壁	
	60~76cm壁	90cm壁	135cm壁 (※1)	3W板 ※2	90cm壁	135cm壁			
2階	2.0	3.6	5.4 (4.5)	4.5 6.2	3.5	3.0	1.7	3.1	2.0
1階	2.5	4.0	6.0 (3.0)	11.2 10.0	4.0	5.0 (3.0)			2.0

※1: 当該耐力壁に限り、1.8m以上の開口に接する外端壁として使用される場合は、それぞれの壁の保有水平耐力として、表中の()内の数値を用いる。

※2: 上段の値は $A_2/A_1 \leq 0.5$ の場合、下段の値は $A_2/A_1 = 1.0$ の場合を示す。 A_2/A_1 が中間の場合は、直線補間により求める。

※3: 連続箇所は、壁種類にかかわらず耐力壁又は支持壁間の連続箇所を考慮することができる。但し、3W板との連続箇所は考慮しない。

3. 耐震診断の書式例

(外観-1)

建物の概要及び外観調査			
建物の概要			
内外装	外 壁		屋 根
	窓		床
	間仕切壁		
使用履歴	増 築	無・有 年 規模・状況	有 年 規模・状況
	改 築	無・有 年 規模・状況	有 年 規模・状況
	補修・補強	無・有 年 規模・状況	有 年 規模・状況
	用途変更	無・有 年 規模・状況	有 年 規模・状況
被災経験	地震被害	無・有 年 規模・状況	有 年 規模・状況
	火 災	無・有 年 規模・状況	有 年 規模・状況
	水 害	無・有 年 規模・状況	有 年 規模・状況
	そ の 他	年 規模・状況	年 規模・状況
地盤	地盤種別	1種・2種・3種	
	敷地概況	<input type="checkbox"/> 埋立地 <input type="checkbox"/> 軟弱地盤 <input type="checkbox"/> 水田跡 <input type="checkbox"/> がけ地 <input type="checkbox"/> 海岸から2km以内 <input type="checkbox"/> 現在又は旧地名が、水、川、湖等に関係がある	
特記すべき使用環境	例：化学薬品を使用している又は振動がある		
外 観 調 査			
不同沈下			
建物の傾斜			
外壁のひびわれ			
そ の 他	<input type="checkbox"/> 雨漏りがある <input type="checkbox"/> 外壁の老朽化による剥離が著しい <input type="checkbox"/> 被災経験のこん跡がある		
受付番号	建物名称	調査年月日 年 月 日	調査担当者

建物の安全性の確認（臥梁付中型コンクリートパネル造）

偏心率の算出		
重心・剛心	重心位置	剛心位置
	2階 x = m	2階 Dx = m
	y = m	Dy = m
	1階 x = m	1階 Dx = m
	y = m	Dy = m
偏心率, Fe	偏心率	Fe
	2階 Rex =	2階 Fex =
	Rey =	Fey =
	1階 Rex =	1階 Fex =
	Rey =	Fey =
採用した 安全性の 確認方法	<input type="checkbox"/> 換算壁量による確認 <input type="checkbox"/> 保有水平耐力による確認	

換算壁量の確認結果	(1) 基準壁量の算定 (算定式と結果)
	2階 X方向:
	Y方向:
	1階 X方向:
	Y方向:
	(2) 換算壁量の算定 (算定式と結果)
	2階 X方向: 壁長さ=
	壁量算定用床面積=
	換算壁量= () / () = ()
	Y方向: 壁長さ=
壁量算定用床面積=	
換算壁量= () / () = ()	
1階 X方向: 壁長さ=	
壁量算定用床面積=	
換算壁量= () / () = ()	
Y方向: 壁長さ=	
壁量算定用床面積=	
換算壁量= () / () = ()	
(3) 換算壁量と基準壁量の比較結果	
2階 X方向: (1)の結果 () ≤ (2)の結果 ()	
Y方向: (1)の結果 () ≤ (2)の結果 ()	
1階 X方向: (1)の結果 () ≤ (2)の結果 ()	
Y方向: (1)の結果 () ≤ (2)の結果 ()	
(4) 判定	
判定 (一応倒壊しない、倒壊する可能性がある)	

保有水平耐力
の確認結果

(1) 建物の地震力荷重

2階:

1階:

(2) 必要保有水平耐力の算定

階	w_i (tf)	W_i (tf)	α_i	A_i	D_s	Z	R_t	Fe	Q_{un} (tf)
2					0.55			X: Y:	X: Y:
1								X: Y:	X: Y:

(2) 保有水平耐力の算定 (算定式と結果)

2階 X方向: 保有水平耐力=

$$Q_u (\quad) \geq Q_{un} (\quad)$$

合否の判定 (合 , 否)

Y方向: 保有水平耐力=

$$Q_u (\quad) \geq Q_{un} (\quad)$$

合否の判定 (合 , 否)

1階 X方向: 保有水平耐力=

$$Q_u (\quad) \geq Q_{un} (\quad)$$

合否の判定 (合 , 否)

Y方向: 保有水平耐力=

$$Q_u (\quad) \geq Q_{un} (\quad)$$

合否の判定 (合 , 否)

(4) 判定

(安全 , 安全ではない)

建物の安全性の確認 (臥梁付中型コンクリートパネル造 ※1)

偏心率の算出		
重心・剛心	重心位置	剛心位置
	2階 x = m	2階 Dx = m
	y = m	Dy = m
	1階 x = m	1階 Dx = m
	y = m	Dy = m
偏心率, F e	偏心率	Fe
	2階 Rex =	2階 Fex =
	Rey =	Fey =
	1階 Rex =	1階 Fex =
	Rey =	Fey =

※1：耐力壁高さ 2650 mm

換算壁長の確認結果 ※¹

(1)必要壁長の算定 (算定式と結果)

2階 X方向: 基準壁量 負担延床面積 La Fe
 必要壁長= () × () + () × ()
 =

Y方向: 基準壁量 負担延床面積 La Fe
 必要壁長= () × () + () × ()
 =

2階 X方向: 基準壁量 負担延床面積 La Fe
 必要壁長= () × () + () × ()
 =

Y方向: 基準壁量 負担延床面積 La Fe
 必要壁長= () × () + () × ()
 =

(2)換算壁長の算定 (算定式と結果)

2階 X方向: 換算壁長=

Y方向: 換算壁長=

1階 X方向: 換算壁長=

Y方向: 換算壁長=

(3)換算壁量と基準壁量の比較結果

2階 X方向: (1)の結果 () ≤ (2)の結果 ()

Y方向: (1)の結果 () ≤ (2)の結果 ()

1階 X方向: (1)の結果 () ≤ (2)の結果 ()

Y方向: (1)の結果 () ≤ (2)の結果 ()

(4)判定

判定 (一応倒壊しない、倒壊する可能性がある)

※1: 耐力壁高さ 2650 mm